

次目

吉野の歴史探訪

言葉の

ハジメテマーカーは

△の形を調音一のまじりを見さの調音の高の

2022年度

地域の子ども研究会

～地域の子どもの豊かな生活・成長を目指す～

年間テーマ：地域の子どもに目を向け、アクションを！

吉野の歴史

合本水一水は

合本水一水は

合本水一水は

合本水一水は

目次

研究活動の報告

- 愛着
- アンガーマネジメント
- 貧困研究から見たもの～居場所作りへ～

各担当の報告

- 情報交換担当報告
- 研修会担当報告
- 行事担当報告

行事の報告

- ドッジボール大会
- 将棋大会
- ともだちフェスティバル

個人の振り返り

研究活動の報告

研究活動テーマ《愛着》

参加メンバー

やまと保育園子どもの家（赤嶺 優真）

今池こどもの家（山田 夢果）

今川学園子どもの家（森川 貴史）

研究テーマに至った経緯

研究テーマを決めるにあたり、昨年に引き続き“愛着”をテーマにして、今年度はもう少し深く掘り下げてみようということになった。“愛着”といってもその概念は幅広く、子どもや親が抱えている問題は様々である。昨年は、事例を通して研究を重ねることで、その事例の抱える問題やそこで起きている事象への解決方法や緩和する方法が少し見えてきた。その中で愛着関係とは、親子関係だけではなく、第三者の私たち指導員とも築くことが可能ではないかと感じ、親と子の懸け橋になれるように“相談役”“聞き役”に徹しても良いのではないかと感じた昨年だった。昨年を踏まえて第三者の私たちが、親に！子どもに！何が出来るのかを考え、再度“愛着”とはなに？“相談役・聴き役”になった際、この関わりが“愛着”にどう影響するのか？を基に研究活動を進めた。

研究活動のねらい

『愛着を築くためには職員として何ができるか』

研究方法

- ・前年度の振り返り・情報共有
- ・スタッフ間で討議し、愛着について考える
- ・事例を基にディスカッション
- ・まとめ

研究内容

○前年度の振り返り・情報共有

昨年度は、愛着について理解を深め、家庭支援について考えていく事をテーマにあげて取り組んだ。実際に施設で過ごしている子どもの様子やエピソード、保護者との関わりなどを共有し、話し合う中で愛着関係に問題があるのではないかと思う3つのケースを基に事例検証を行った。事例検証を行った中で子どもたちが『楽しい・行きたい』と感じられる環境・空間が必要であり、保護者からの愛情だけではなく、保護者の話も指導員が聴き、対象児に対してゆっくり寄り添い、時間を作り、愛情を注ぐ事で親と子の懸け橋になれるのではないかと考えた。

そこで指導員は“相談役”“聴き役”に徹する事で愛着関係は構築出来るのではないかという段階で研究を終えている。

〇スタッフ間で討議し、愛着について考える

では、上記の“相談役”“聴き役”に徹する事は愛着関係にどう影響するのか？愛着を形成するにあたり、乳幼児期の心の発達に愛着の形成は大前提で人に対する基本的信頼感を育み、心の発達や人間関係に大きく影響する。小学生以上の子どもたちに愛着を形成することは可能なのか？“相談役”“聴き役”になる事で愛着が築けるのか？という疑問が上がった。

愛着関係と信頼関係について考える。

愛着関係は、心理学的に乳幼児と養育者の間で形成される絆の事を言う。愛着関係を形成することは子どもの成長に重要な役割を担い、大人になってからの人間関係にも影響する。愛着関係を築くために何か特別な事をしなければいけないということではなく、毎日の積み重ねにより自分が愛されていることを実感し、愛着関係が築かれる。必ずしも親でなければならないというわけではなく、主に養育している人が役割を担い、近年、愛着関係を形成できないまま成長してしまい、大人になってから周囲の人と人間関係を構築するのが苦手になってしまうケースが少なくない。その影響は現在、社会問題している虐待や育児放棄などと深く関係している。

信頼関係とは、お互いがお互いを信じて頼りあう関係性のことを言い、夫婦や恋人などパートナーとの関係性を表す時や、上司や同僚など会社の人間関係を表す時にも使われる。

議論していく中で指導員を叩いてコミュニケーションをとろうとする子どもが多いように感じるという話題が上がり、その行動の背景には、家庭での愛着不足、試し行動、愛着を求める行動として理解すると子どもの行動についても理解が深まるなどの意見が上がった。

また違った側面で、昔は大人と子どもの関係が上下の関係にあり、大人は怖い存在！すぐに聞けたり、話しかけられる存在ではなかった時代があった。しかし、現在は、大人と子どもが対等な関係に近づく反面、親と子が友達みたいな関係や、子どもに必要な教育や意見を言えない大人が増えたから軽い気持ちで叩くような行動をとるのかもしれないという時代背景も感じられた。

愛着関係は信頼関係の土台となるもので子どもが養育者に対して特別な信頼関係を結ぶことが愛着関係を形成したことになる。

信頼は、愛着の上に成り立つために愛着が不足している子どもに対しては、信頼関係を築けないのか？0か100ではない、数字で表せるものではないが、もし40の愛着を乳幼児期までに築けていた場合、40までの信頼関係しか築けないのかなど疑問が出た。

調べていく中で愛着には、様々な型があり、安定型・見捨てられ不安型・引きこもり型・関係構築回避型がある。安定型は、子どもの不安や怒りに気付け、関係構築回避型は、子どもや保育者に対して全般的に拒絶的。見捨てられ不安型は、親が子どもに対して自己都合が優先されることが多く、引きこもり型は、子どもの愛着は予測不能で親は子の行動に過敏であったり、抑うつ的であったりと波が大きいとの事だった。

愛着は保護者支援によって回復する可能性がある事も討議していく中でわかった。保護者支援ではなく、家庭全体に目を向けていき、子どもだけにフォーカスを当てるのではなく、家庭全

体を支援する事で子どもにも反映できるのではと話になった。愛着を回復するために子どもの愛着スタイル（型）を把握・理解したうえで関わりを考える事が大切なので次のステップとして事例を基にスタイルを把握し、事例に対してのアプローチがないかを探っていくことになった。



〇子どもたちの事例を基にディスカッション

日付	令和 5年 2月 14日	時間	18:00
【記録にした理由】 自分の気持ちを表現してくれてうれしかったから			
【タイトル】 私たちのバレンタイン			
【背景】 <<家庭背景>> ・一人っ子・ネグレクト・同アパート内に祖母宅・叔母宅・叔父宅がある・母も被虐待の経験あり・母は愛着形成の形でいえば見捨てられ不安型・母親知的障がい・精神障がいあり・自宅の浴槽故障中・母にはパートナーあり(1年2か月交際中)・愛着形成の形でいえば不安定型・大人の言動には敏感 <<施設での様子&本児の特性>> 1年生の時から継続的に来館している小学6年生女兒。学年が上がるごとに同級生の来館が減			

り、年下児と遊ぶことが多いが、同級生が来館していれば、関わる姿もある。本児は週 3 回ほどの来館日数となる。現在は施設のクラブ活動に所属し打ち込んでいる。低学年のときは職員との異動について“裏切り”と思う感情があり、それを疑問として保育者に投げかける様子があった。また、思い通りにいかないと大声を出して叫んだり、頭を強く掻いたりすることもあった。他者（外部の人間）が来館した際は、職員よりも自分の方が強いという姿を、様々な方法で示そうとする。率先して役割を果たそうとする姿もあれば、わざと果たさずに傍観しているときもある。基本的に我慢強い。分からないことがあってもわかるふりをする。最近では自分の感情を言葉にして表出する場面はなし。

《エピソード当日背景》

クラブ活動に、トレーナーが来館する。バレンタイン当日で、他児が職員にチョコを渡す姿を見る。自ら職員に近寄り苦笑いしながら「友チョコしか渡してへんねん」と伝える。クラブ活動が始まり滑る床を懸念し、職員が雑巾を用意する。クラブ活動が終わり本児自ら雑巾を洗いにいく。そして、洗った雑巾を両手でつつみ隠すようにつかみ、職員に対して笑いながら「いいものあげるわ。はい、バレンタイン」と言いながら手を広げ雑巾をみせる。その後「自分でキレイにしてんで、すごいやろ」と職員の目をじっと見ながら照れくさそうに笑って話す。

【当日の言動】

職員は「ありがとう。食べるわ。自分できれいにするとかやるやん」と伝え受け取った後、雑巾を乾かす。帰り際に「友達やのにな～。友チョコ欲しかったな～」と笑いながら伝えると「あげたやん。てか、友達ちゃうし～」と応えながら帰る。

《考察：愛着》

基本的に、愛着形成の確立が難しかった子は、自らの気持ちをストレートに表現することに不安や恐怖心を感じていることが多いと思う。その為、トレーナーに対して自らの努力を間接的に伝えたかったのではないかと感じる。また、周りを観ながら自分は職員に対してチョコを持ってきていないという、罪悪感や嫌われるかもしれないといった不安感と共に、それを自ら言葉にして伝える事の難しさ等々、様々な気持ちからの言動であるのではないかと考えた。これまでの背景の中で少しずつアクションを起こすことが少なくなってきた本児に対して、このような機会を逃してはならないと感じる。また、この場だけではなく関わりを振り返り、アフターフォローもしていきたい。

【研究活動内実演ディスカッション】

背景・エピソード・当日の言動を振り返りながら、本児が現在の愛着関係を持ったまま育つと、将来どのような人格が形成されていくのか、愛着の観点で話し合った。そして、愛着形成を回復できるような関わり方はどのような方法があるのか、また反対にどのようにすれば悪化していくのかをロールプレイをしながら探っていった。

《不安・回避を高める関わり方》

「そんなん良いからはよ片付けて」と、突き放す。

- ・関係ができていいる→不安が高まり、回避は低くなる（見捨てられ不安型）
- ・関係ができていない→不安は低い、回避は高まる（関係構築回避型）

《回復できるように》

子どもの表現について認める。そして、友達じゃないという試し行動のような発言に対しては「1年かけて友達になろう。」等提案をする。さらに「来年は作ってほしいな」と、具体的な未来の提案もすることで、本児の“不安”といった感情は取り除けるのではないかと話し合い考えた。また、自分の感情を表現することへの自信にも繋がる。

【まとめ】

この話し合いから、当日の「友達やのにな～。友チョコ欲しかったな～」といった言動は、“あげたことにならなかったのか”と、さらに本児の不安を増すものだったかもしれないことに気付いた。そこで、アフターフォローとしてホワイトデーの日に「あの時くれたよね」と、何かを、お返しすればいいのではないかと案が出た。

愛着という観点を持ちながら一人一人の背景を観察し、探りながらその子どもに合った支援方法を模索すること、実践することの重要性を改めて感じた。

〇まとめ

愛着とは、主に乳幼児期に子どもと養育者に対して形成する心理的な結びつきのことであり、乳幼児期に十分な愛着を形成できない場合、それが後になって不安の原因になることがある。不安定な愛着形成により、成人後も親密な人間関係に対して危険を感じるために孤立しがちになり、結果として感情面で不安定になる傾向が強まると考えられる。

愛着は、成人になってからも回復することは可能であり、愛着は保護者支援によって回復し、保護者支援だけではなく、子ども自身にもフォーカスを当てた支援が必要なため、家庭支援に目を向けていく必要性を感じた。愛着を回復するために子どもの愛着スタイル（型）を把握・理解したうえで関わりを考え、子どもにアプローチをしていく必要があると考えられた。

型を認め、スタイルを修正することは、親の子育て自体を否定することに等しいので最善の配慮の基、保護者のスタイルを寛容し、保育者の姿を見せていく事が重要であり、保育者が見本を見せる事で保護者に気付いてもらうために待つことが大切であることがわかった。愛着を研究したメンバーだけで留めるのではなく、研究会メンバーにも伝え、各施設に持ち帰り、実績を増やして子どもたちに還元できるように取り組んでいきたい。

研究活動「アンガーマネジメント」

参加メンバー

長居子どもの家：横山 奈津美

阿さひ保育園つくし会：木野 伸哉

平和の子どもの家：小澤 麻里

四貫島友隣館子どもの家：萩野 遥馬

はじめに

今年度も、昨年度からの継続でアンガーマネジメントについて学んできました。

昨年度は指導員自身がアンガーマネジメントについて学び実践していく事をメインとし研究を進めてきました。研究を進めていくうちに、最終的には子ども達に伝えていければ、という思いを持ちながらも時間が足りず、子どもたちに伝えるところにまで達することができませんでした。

そこで今年度は昨年度研究をして学び、少しずつですが理解できるようになってきたアンガーマネジメントについて困っている子ども達に伝えていけるように研究をしていきました。

研究活動に至った経緯

メンバーそれぞれの

○クラスの子どものがすぐに怒り手を出す子があるので、どうして行けばいいのかわからず怒りについて知りたいと思ったから。

○自分が普段全く怒らず、怒るのが苦手なので、色々知りたい。

○アンガーマネジメントについて自分自身学んだ事を、次に子ども達に伝えていければと思う。

○子ども達がどのような事で怒っているのか知りたい。

という思いから研究が始まりました。

研究活動のねらい

- ① 昨年度学んだ事を復習しながら学ぶ
- ② 子ども達の怒りについて知る
- ③ 学んだ事を子ども達に伝える
- ④ アンガーマネジメントの大切さを伝えていく

① 昨年度学んだ事を復習しながら学ぶ。

●まとめ●

今年度から新たにアンガーマネジメントの研究に加わった方から、「クラスの子どもがすぐに怒り手を出す子がいるので、どうして行けばいいのかわからず怒りについて知りたいと思った。」という声が上がりました。

そこで、すぐに怒ってキレる子どもの事例を挙げその子について意見を出しあい討議をしてきました。メンバー間の討議の中で昨年学んだ情報を共有し、一年を通してその子の話をする中でどのように変わっていくかに注目し、考えながら継続していきました。

一年たった今では、一人の指導員だけではどのように関わって行けばいいのかさえ分からなかったことがこの研究活動で情報を共有していく中で、そのことに関わりをじっくり持てた事で保護者との連携などができ、子どもも落ち着いて過ごせることができるようになって来ました。

昨年度学んできたことを伝えるのと同時に再度アンガーマネジメントについて学べる機会となりました。

② 子どもたちの怒りについて知る。

子どもたちにアンガーマネジメントを伝えるにあたって、実際のところ子ども達がどのような事で悩んでいるか、どのような事で怒っているのかを知りたいと思いアンケートを取りました。

「どんな些細なことでもいいから普段の生活の中で「誰に対して」「どんな時に」怒ったかを教えてほしい。」

という内容で各施設にお願ひし、子どもたちにアンケートを取ってもらいました。

アンガーマネジメントアンケートまとめ

【誰に対して。どんな時に怒ったか。どんなことに怒っているか。】

家族
兄・姉
悪口を言ってくる。 ちょっかいをかけてくる。 マッサージしてくれるけど、文句言いながらされる。 髪の色を染めたことを自慢してくる。
弟・妹
やってと言ってるさい。やらなかったら叩かれる。 けんかした時。 妹がわがままで怒った。 弟のせいで母親から理不尽に怒られる。

父・母

お母さん・お父さんに怒られた時。
パパは優しいから怒らない。
ママとはたまにしか会えないから喧嘩したらもう会えなくなってしまうと思うから怒らない。
お父さんのシャンプーがスースーする時。

自分

製作物が上手くいかず腹が立つ。
水道の水がかかってしまった自分に怒った。
スイミングでバタフライが上手に出来なかったとき。
思い通りにならなかったとき。
悔しい時。
描いてた絵が汚れて自分のせいだったので自分に怒った。

学校

友だち

男子が変なポーズをしてきた。ふざけていた時。
あおられた時。
ゲームを貸してもらった時にドレミの歌をピアノで弾けたらと言う条件を付けられた。
キャラクターが死ぬたびに何度も。
友だちが信号無視をしたので注意したけど、全然聞いてくれなかった。
学校で、磁石で遊んでる友だちがいて、遊んだらあかんと注意したときに、画びょうが落ちて、お友だちに刺さってしまって、気まずくなった。
かんちょうされた時。
命令された時。

先生

怒る時と怒らない時の差が激しい。関係ない時でも怒られる。
生徒差別している。(男子に甘く女子に厳しい)
決めつけてくるとき。
しんどい時に保健室に行っていいか聞いたが授業中だからと断られた時。
怒られた時
仕事をせずに遊んでいる子には何も言わず、自分の役割が終わっている僕には新しい仕事を振ってくる。

その他

大好きな子に振られた。
自転車のタイヤがパンクしていた。
犬が噛んでくる。

●まとめ●

子どもたちにアンケートを取った結果、身近な小さな事だとあまり怒りの爆発もそこまで大きくならないが、小さな怒りが積み重なると大人と同じように爆発してしまい大きな怒りに代わってしまい自分で怒りをコントロールする事が難しくなるのだと感じました。

しかしそんな中でも日記にその日に合った嫌だったことを書き留める、といった自分なりの対処法を持っている子もいました。また、寝たら忘れる、あんまり覚えていない、といった子も少なくありませんでした。

何気なく過ごしている日々の中でも子ども達の心の中にはたくさんの思いなどが秘められています。なんでも話せる場や環境なども大切だと思います。

しかし怒る事がいけない事ではなく、自分の苛立ちだけを相手にぶつけるのではなく、お互いの事を考えながら自分の思いも伝え、相手の思いも受け止められる事も人間関係を築いて行く大切な事の一つでもあります。

③ 学んだ事を子ども達に伝える

④ アンガーマネジメントの大切さを伝えていく

以上のことを踏まえ、メンバーが学んできたアンガーマネジメントについて子どもたちに知ってもらうための方法として

- アンガーマネジメントについてのポスターを作成する。
- 子どもたちの目に留まるように、各施設に掲示して頂く。
- 子どもたちの反応を調査する。
- 再度子どもたちにアンケートを取り、アンガーマネジメントについてどれだけ浸透したか、怒った時の対処法の変化などを知る。

を考えました。

●まとめ●

初回のアンケートの回収、ポスターの作成等に時間がかかってしまい、ポスターの掲示以降の活動にまで至りませんでした。子どもたちの反応、変化を知ることが出来なかったのは非常に残念です。

全体のまとめ

昨年度から継続して取り組んできたアンガーマネジメントでしたが、新たなメンバーが加わったことで、昨年度学んできたことを共有しながら再度確認する形となり、よりアンガーマネジメントの大切さを知ることができました。

そして指導員が学んだことを1年間かけて子どもに伝えることで怒りの表し方が変化し穏やかに過ごすことが出来るようになっていくことも実感できアンガーマネジメントの必要性や実際に効果があることがわすかながらですが感じることができました。

子ども達も日々の生活の中で怒りを感じながら過ごしていることもわかりました。初めは些細なことが積み重なって大きな怒りとなって爆発してしまう。自然に自分でそれを感じて対処法を見つけ、怒りを解消している子も中にはいますが、それが出来ずに周りにも自分にもしんどい思いをかけてしまう子が多いこともわかりました。

今年度の研究活動の中で掲げたねらいのうち、後半が実践できず、多くの子ども達に怒りとの向き合い方、アンガーマネジメントについて伝えることが出来ませんでした。

しかしこの2年間で学んできたことを研究会メンバーを通して子どもたちに伝えられるように努めていきたいと思います。

※作成したポスター※

☆ おこ もう怒ったぞ!

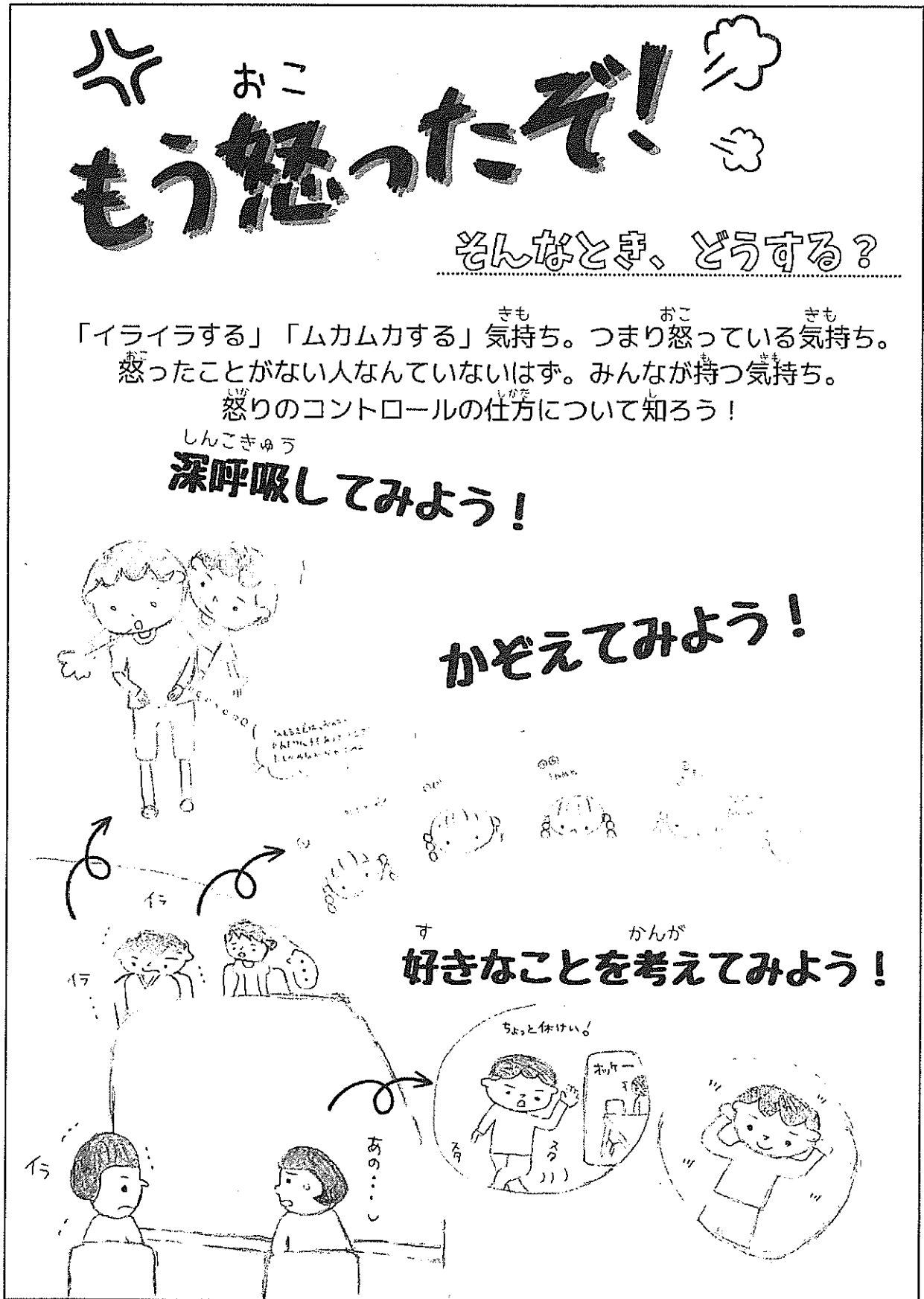
そんなとき、どうする?

「イライラする」「ムカムカする」^{きも}気持ち。つまり怒っている^{おこ}気持ち。
怒ったことがない人なんていないはず。みんなが持つ^{きも}気持ち。
怒りのコントロールの仕方について知ろう!

^{しんこきゅう}
深呼吸してみよう!

かぞえてみよう!

^す ^{かんが}
好きなことを考えてみよう!



2022年度 研究活動『貧困研究から見たもの～居場所作りへ～』

貧困について考える（2021年度継続テーマ）

参加スタッフ

長居子どもの家：川畑 亮輔

育徳園子どもの家：上西 貴之

愛染橋児童館学童クラブ：秦野 充勇

望之門学童クラブ：大西 奈々子

テーマに至った経緯

2021年度『貧困について考える』というテーマのもと研究活動に取り組み、貧困に対して知識の乏しさを痛感した。2021年度の児童部会へは地域で活動されている永田華子さん（高殿子ども食堂「あのね」代表）を招き、子ども食堂の取り組みや子どもの貧困について話を聞くことが出来た。子ども食堂＝貧困家庭への支援というイメージが社会にはまだまだある。永田さんからは居場所支援・地域へのニーズ調査・より密な（個別な）支援・地域との繋がり場の確保等、ボランティア活動の一環として行われている事、貧困問題を単に経済的に問題だけで捉えるのではなく、貧困から生まれるさまざまな生きづらさへのケアも必要であると実践報告と共に教えて頂いた。

地域の子ども研究会で出来る地域への取り組みは何か？と考えてきた中で、まずは地域の子どもたちに“豊か・楽しい・人の温かさ・賑わい”を感じてもらうこと、研究会スタッフが地域の子どもたちと関わっていくという当事者意識を持ち共に楽しむこと、自分たちに出来ることは何か？地域のニーズはどこにあるのか？その先に必要な支援は何かを探りたいと考える。

地域の子どもたちのニーズを探り、個人・自施設・大地協でどういった支援ができるのか、短期・中期・長期支援は何か出来るのか？を考えていきたいと思いテーマ設定に至る。

ねらい

- 地域の子どもたちの現状や課題・見えにくい潜在的なニーズを捉える。
- 地域の子どもたちへ意識的に目を向け、自ら関わっていくという当事者意識を持つ。
- 自施設だけでは解決しづらい課題に対し、地域の子ども研究会でなら出来るのではないかと考える

研究の方法

- ① 現在の自施設活動・地域の活動の共有、スタッフの意見交換
- ② イベント企画に向けて（前年度からの引き継ぎ）
- ③ 実践に向けて
- ④ 研究活動まとめ

研究活動内容

第1章：現在の自施設活動・地域の活動の共有、スタッフの意見交換

地域の子どもたちへ向けて各施設で行っていたイベントや活動が、コロナウィルス感染症の影響により中止や制限をかける事になり約3年が経過した。現在こういった活動を行っているのか、再開予定や新たな活動・支援は何かを情報交換した。

また地域の子どもたちや保護者の変化、スタッフの感じた事を共有し、実践に繋げるべく意見交換を行った。

中止している(いた)活動について

- ・園開放(地域の乳児・幼児・保護者対象)
- ・サロン活動
- ・お祭りへの参加(在園児のみ対象となり地域の子は対象外に)
- ・地域の小学生を対象とした居場所作り
- ・特養などの高齢者施設との交流

感染症の影響により、まだまだ活動の再開が出来ないものが多いと感じる。特に不特定多数を対象とした地域の子どもたちへのイベントなどは行えていない。しかし工夫や制限をしながら新たに活動を行った施設もあった。

再開した活動・新たな活動・工夫した内容など

- ・地域の小学生を対象とした居場所作り(卒園児1年生のみ対象)
- ・既存のクラブ活動に参加(途中退所児対象)
- ・クラブ活動を通して他チームとの交流
- ・研究会参加施設の中では法人内の事業として居場所活動を展開している施設もあった。

コロナでの休校から学童に通う子どもが不登校になり、学童を朝から開所したのが始まりでした。その活動を続けるうちに、地域の中で困りや悩みを抱える子どもが見えてきました。施設の中で登録している児童だけではなく、地域の子ども達にも目を向ける、地域の誰かの居場所になる活動をと考え始めました。小学生、中学生が朝から学童に来て、ただ一緒に過ごす。食事を共にする。こんなんやりたい！をやってみる。ひとりひとりが自分らしく過ごせる場所を意識して活動しています。また子ども達が主体となり地域のイベントやお祭りにも参加したり、子ども達同士が繋がり、本音を吐ける場所として子ども食堂などの施設でのイベントも行ってきました。

まだまだ以前のように大勢が集まり賑やかに…といったイベントや活動の再開に目処が立っていないのが現状である。しかし各施設・地域で「このままではいけない」と、必要と考える地域に向けたイベントが人数制限や対象を限定するなどの工夫をしながら再開・開始されている。

そういった活動再開を喜ぶ一方で、参加している子どもや保護者の意見・様子から、現状の活動内容だけではなく、違った視点や方法を取り入れないといけないのではと思う意見も多くあった。

スタッフの意見交換

- ・徐々に在園の子どもたちの行事等が再開する中で、地域の子どもたちへの活動の再開が中々進まないと感じる。
- ・在園の子ども・保護者は顔が見え声も届きやすい関係だからか？地域の子どもたちのニーズは見えにくくなったと感じる。

- ・対象が限定的で在所児と地域の子どもたちが交わらず、子どもたちの様子が気になっている。
- ・様々なイベント等が予約・申込制となり、保護者によっては利用しづらい方もいるようである。
- ・何度か地域のイベントのお手伝いをしましたが、大人も子どももイベントに飢えていると感じた。地域の方からは、子どもたちは人との距離感や集団で遊ぶ楽しさ、難しさを知らずにコロナ過で過ごしてきた。一人で遊ぶことが増えコミュニケーションがうまく取れない子が多い。以前のように大勢で楽しめるイベントに参加させてあげたい。などの声が聞かれた。

意見交換の中で「このままではいけない」「何か一步活動を踏み出したい」と感じているスタッフが多いが、実際に何をすればいいのか、地域の子どもたち・保護者の方のニーズが何か、どういった活動がいいのかとの討議に至らなかった。自施設での活動に加えて、今何が必要で、大地協や子ども研究会で何が出来るのか、どういった活動が必要だと考え、実践可能か考えていく。

第2章：イベント企画に向けて（前年度からの引き継ぎ）

さまざまなイベントや人と関わる交流の場が制限・中止され、まずは交流の場を作って子どもたちはもちろん参加スタッフが人と触れ合い、温かさを再確認し、賑わいを感じる中で、自分たちに出来ることは何か？地域のニーズはどこにあるのか？この先に必要な支援は何かを探ることがまず必要ではないかとイベント企画を行う。

地域の子ども研究会

地域の子どもたちに向けてのイベント（案）

イベント企画に至った経緯

地域の子どもたちや中高生の現状を捉えた際に、今どんなことに困り必要としているのか、また感染状況が落ち着いた後に必要な事は何か、既存の活動に反映、もしくは新たな活動に繋げたいと企画に至る。

自施設単位ではなく地域の子ども研究会として活動する意図として、

- ・多様な現状や課題・見えにくい潜在的なニーズを捉える
- ・地域の子ども研究会で情報交換・共有する中で自施設の活動を見つめなおし、改めて大切だと感じる活動を、それぞれが再開に向けて動き出すきっかけになる
- ・自施設だけでは解決しづらい課題に対し子ども研究会でなら出来るのではないかと
- ・自施設の地域と他地域の共通点、相違点を互いかつ、同時に探りそれぞれの『地域の子どもたち』には何が必要なのか、自施設には何が必要なのか、さまざまな視点、広い視野で考える必要があるのではないかと
- ・実際の子どもの姿を観なければなにもはじまらない

と考え探る中で子ども研究会として地域の子どもたちと関わっていく当事者意識を持ち、踏み出す第一歩となるよう企画を始めた。

共有する中で、各施設で行われていた地域の子ども達たちに向けた活動が中止・縮小され、2020年度・2021年度・2022年度の地域の子ども研究会の行事も各施設の子どもたちのみ対象に行われている現状である。既存のイベントでは規模が大きく、更には自施設の子どもたちへの感染予防対策の観点から地域の子どもたちとの触れ合いが難しい状況である。一過性のものではあるが、地域の子どもたちが対象のイベントを行う事で、その地域の子どもたちとスタッフが触れ合い、楽しんでもらい、その中で地域

の子どもたちの新たなニーズを掴む事が出来ればと企画する。

ねらい

- ・地域の子どもたちとスタッフが触れ合い、子どもが主体的に楽しむ
- ・地域の子どもたちの新たなニーズを掴み、各施設での活動に繋げる
- ・各施設だけの学童指導員では担えない人数と視野の拡がりに期待を持ち、情報共有の中で新たな企画へと繋げる
- ・地域での活動の重要性をスタッフが再確認する
- ・今自施設では出来にくい地域での活動も、地域の子ども研究会で担っていきたい
- ・地域の子どもたちの居場所作りに反映できるようにする

対象

- ・地域の子どもたち（小学生・中高生）

内容

- ・無料遊び
- ・2021年度のともだちフェスティバル内容（縮小版）だと企画もスムーズ
- ・地域巡回
- ・食材配布（大地協加盟施設に協力依頼できないか）
- ・相談コーナー

イベント後の目指す姿

- ・イベントで出会った保護者・子どもたちとの関りが途切れないように、反省点を踏まえて次のイベントに向けて活動する。単発のイベントで終わらせない
- ・活動を通じて自分に今何が出来るのかを考え、自発的に行動できる人材を育てたい

考えられる課題について

- ・コロナ対策(感染予防策・陽性者が出た場合どのように後追いができるようにしておくか)
→必ず必要ではあるが、大々的にやりすぎると大人が主体であるイベントのような印象が子ども達につきすぎてしまい、ねらいの達成が難しくなるかもしれない為、工夫が必要
- ・開催する場所に対して縄張り意識を持っている子ども(達)への配慮
- ・それぞれスタッフの気持ちの相違
- ・撮影について、SNSへの投稿について 子どもたちへの周知含め

開催するにあたってしておくこと

- ・開催場所の下見
- ・地域に向けての周知
- ・規模によってはあいさつ回り
- ・イベント内容、役割決め

イベント企画に向けて

(案)①：同じ場所（地域）で繰り返し定期的実施する。

(案)②：場所を一定せず、各地域（研究会スタッフがいる地域）で単発的に実施する。

方法が考えられた。そのうえで両案の利点と課題、研究活動としてどう動いていくか検討する。

(案)① 同じ場所(地域)で繰り返し定期的に実施	(案)② 各地域(研究会スタッフがいる地域)で単発的に実施
○初回は広報活動が難しい予測がたつが、繰り返し行う事で定着すると考える。	○都度各地域で広報が必要
○地域とのつながりが出来れば場所の確保がしやすい(子ども会・町内会・公民館など)	○都度、開催場所の確保が必要
○継続することで見えるニーズがある ○開催地域ではないスタッフは、地域のニーズとは合致しない場合も考えられる。	○各施設の地域で行う事で、その地域特有のニーズをその地域のスタッフが得やすい(感じやすい) ○各地域で単発の企画となってしまう
○イベント内容を都度考えていく必要がある。	○場所が変わるだけで、同じ内容で何度もできるため、事前準備の手軽さがある。
○研究としては同地域で、定期的に、継続して行う事で、同じ利用者が継続して来てくれることが見込め、経過・結果を得やすいのではと考える。 ○継続した結果を得ることでスタッフそれぞれが自施設へ結果を還元できる	○地域のニーズを各スタッフが感じる事で、案①よりもスピード感を持って地域への支援を行いやすい ○以後、施設単体で継続もしくは見えたニーズから新たな活動につながれば研究として充実すると考える

上記様々な利点と課題が見え、案①においては場所をどう選定するのか、案②ではそれぞれの地域で行うにあたっての施設・スタッフの負担や、実際何をどう動けばよいのかわからないという不安も聞かれた。

今年度も地域の子ども研究会既存の行事に地域の子どもたちも参加をするということは難しく、別日で地域の子どもたちのみ対象の行事を企画できないか、その中で地域ニーズを探る聞き取り調査を実施できないか考えた。しかし天候不良等で施設の子ども達対象の行事開催も行えず日程確保・準備期間が少なく難しいと感じていた。子ども研究会スタッフだけで1からイベント企画を行うことの難しさを感じていた中で、西成区のわが町にしなり子育てネット「あそぼパークプロジェクト」の中でやってみてはどうかと声をかけていただき、来場者の子どもたちへ聞き取り調査と無料あそびの提供をさせて頂くことになった。

第3章：実践に向けて

地域の子どもたちのニーズを探るべく聞き取り調査をしようと考えたが、聞き取りを行うにあたってもう一度スタッフ間で何を聞きたいのか討議を行った。

- ・貧困というキーワードで研究を行ってきたが、貧困家庭や貧困問題を単純化した発想で見るとはなく、複合的なしんどさを抱えているケースが多いということに気づいた。その中でも“子どもたちの居場所”というキーワードに焦点を当てて話していたことが多かった。今回の聞き取りでは子どもたちの居場所をテーマに聞き取りを行ってはどうか。
- ・学校へ通い、イベントにも参加している子たちは人との関わりが多くあり、生きづらさを感じ人との関わりが少ない子にこそ、何が必要で求めているのか考えたい。そういったケースの子どもたちは公園には来ないのでは。
- ・家庭に居づらい子はどこを居場所と感じるのか。

・反対に交友関係がしんどい子は家に居て公園には来ない？

様々な意見が出たが、今回あそパーで聞き取りを行うに当たっては、居場所がどこにあるか、どこを居場所と感じているか、今の悩み・大人に聞いてほしい（言いたい）ことはあるかを聞き取り調査した。

西成区の公園での聞き取りを第1回とし、今後住吉区や阿倍野区・浪速区など違った地域で同じ聞き取りを行い、相違点を見つけながらニーズを探っていきたいと思う。

※アンケート結果追記（連絡待ち）

※結果を見てスタッフ考察を追記

「あそパー」質問コーナー

- ① 学年を教えてください！

- ② 習い事(塾・ピアノ・野球など)をしていますか？

- ③ 学童保育・児童館にいらしていますか？

- ④ おうちに帰ってから、夜までこども(1人・兄弟姉妹)だけで過ごすことはありますか？

- ⑤ 放課後やお休み、友だちと遊ぶことはありますか？

最後に…おとなに言いたいことがあったら、自由に書いてください!!



第4章：研究活動まとめ

今年度も“コロナウィルス感染症感染拡大予防の観点”の壁をなかなか越えられず「こんなことしたいな・必要ではないかな」と感じて日程や人員確保、場所、感染予防や準備時間の不足など悩みながら、振り返れば「出来なかったな」と感じた1年でした。研究の中ではスタッフ間で、勤務と有志（ボランティア）、企画の単発と継続（実現可能かどうか）、職員の調査活動と子ども（受け取り側）の感じる気持ちなど様々な視点で話してきました。

勤務と有志・単発企画か長期継続かといった視点では、もちろん長期継続的に居場所の提供ができれば子どもたちにとっても研究にとっても最良だと思います。しかし施設で勤務しているスタッフとして、有志で研究を続けていく・そこには期待を寄せてくれる子どもの姿があり責任が発生し、次第に重荷になってくるのではないかと意見もありました。勤務でとなると施設の理解と実績を伴う研究結果が必要となり、時間と労力がさらに必要になってきます。「やってみたい・必要ではないか」と思う反面「出来るのか・これが最善か」と不安も感じた研究でした。

調査活動内での聞き取りの内容においても、貧困というキーワードから設問を考えましたが、「これを聞いて嫌な気持ちにならないかな」「調査活動の一環ではあるが、子どもたちに嫌な思いをさせてまで聞き取る必要があるか」との意見も上がりました。

結果として、地域へ踏み出すことが難しく出来なかった企画・思いもたくさん感じた1年でしたが、「やりたいな」だけに留まらず、様々な課題が見え不安を感じそれを共有できた事、子どもたちの思いを想像し自分たちに出来ることは何だろうかと討議を続けられたことは、振り返ると当事者意識を持って地域の子もたちと向き合おうとしてきた第1歩となったのではと思います。そこに同じように、地域の子もたちへ何かしたい・より豊かに、安心して過ごしてほしいという願いをもって共に研究を進められた事に感謝しながら、次年度以降さらに学び実践をしていきたいと思っています。

各担当の報告

情報交換について

文責：平和の子どもの家 小澤麻里

今年度の情報交換はあそび紹介と交代で行いました。新しく入ったスタッフが多かったため、みんなが話しやすい、聞きやすい環境を作るため、事前に話し合いたいことを周知し、当日スムーズに話せるように工夫しました。テーマによって全体で発表を行ったり、少人数に分かれて話し合いその後共有する方法などで、15分程度時間を作り実施しました。

1学期が終わった頃に情報交換の場をより実りあるものにするために、共有したいテーマを書き出してもらいました。2学期以降は、行事も増える中で情報交換を行う時間がなかなか取れなかったですが、テーマが決まっていたので短い時間でも有効に時間を使うことが出来ました。

2学期以降特に印象的だったのが、情報交換の場でなくても、研究会が始まる前や休憩時間などそれぞれで悩みや相談、聞きたいことを発信して話し合っている姿がよくありました。指導員同士がフラットにその場ですぐに話が出る、そういった環境が一番の情報交換の場なのだと思います。個々の視野が広がり、スキルアップに繋がる話が出る環境を整えていく大切さを感じました。

日時	場所	テーマ
5/6	育徳園	各施設工夫している環境構成について
5/13	望之門	おすすめのボードゲームや外遊び玩具
5/27	長居	琵琶湖施設ならではの活動
6/10	愛染橋	子どもとの関係性について
10/21	今川	おすすめの遠足場所
12/16	阿さひ	クッキング（おやつ・昼食作りなど）
1/13	育徳園	冬の行事について

2023 年度 研修会

文責：今池こどもの家 山田夢果

メンバー：荻野遥馬(四貫島) 山田夢果(今池) 小澤麻里(平和)

今年度は、これまでの研修会を振り返り、研修会の在り方を再検討・再構築するために、今までとは少し違った視点でねらいを考え、決めました。そして、研究会全体で、学びたいことに加え、どのような実施方法が良いか等、アンケートをとり、研修方法を考えました。また、それぞれの研修会をより良いものとするため、各研修会でのねらいも考え、コロナ禍で途絶えていた外部との交流や、対面での研修会に向けて、取り組みに励みました。

今年度の研修会方法を活かしながら、来年度も研究会内での研修会の在り方をその都度考え、日々の疑問点を探り、それを共有し、それぞれが深く学んでいける機会になればと感じています。

ねらい

◎『自分たちで学ぶ』『楽しく学ぶ』為に、研修方法を試行錯誤しながら、学びや知識・新しい考えを得られるようにする！

内容

1 学期 「キャンプファイヤー研修」

ねらい 他施設のキャンプファイヤーの行い方を知り、改めてキャンプファイヤーの意味を考える。

2 学期 「マジック研修」

ねらい 子どもと関わる上で身につけておくとかっこいい。手品に興味を持っている子との繋がりを増やしたい。子どもたちの興味や関心を広げたい。

3 学期 「放課後等デイサービス 施設見学研修」

ねらい 放課後等デイサービスの活動内容や、子どもたちへの関わり・支援内容を知る。

●「キャンプファイヤー研修」

キャンプファイヤーの研修では、普段実際に行っているキャンプファイヤーを3施設に実践してもらいました。その際、他の指導員は高校生、中学生、小学生の子ども役になりきり参加しました。

各施設によって、指導員が中心になりゲームや出し物を行う施設やお手伝いの高校生が中心となって子どもたちが出し物を考える施設など、取り組み方はさまざまでした。

子ども視点に立つことで見えてきたことを各施設持ち帰り、実際にキャンプでどう活かせるか検討をし、夏のセツルキャンプに取り入れました。

夏休み明け、今回の研修で学んだキャンプファイヤーの行い方を取り入れている施設も多数あり、実践に活かすことが出来ました。

今回の研修を通してキャンプファイヤーだけではなく、各施設で行われているさまざまな取り組みを共有する活動の必要性を感じました。



●「マジック研修」

此花区子ども子育てプラザ健全担当の宮地ダニエル秀和先生を講師としてお招きし、マジック研修を行いました。

まずは子どもと関わる仕事にマジックを取り入れる意味などをお話しいただきました。その後、トランプマジックと輪ゴムマジックの2班に分け1時間半ほど先生からレクチャーを受け、お互いに成果を発表し合いました。

マジックを見ている時は素直に驚き、子どものように目を輝かせている姿が見られましたが、いざ教わるとなるとタネを解き明かそうと必死になっており、大人の意地を垣間見ることができました。

ああでもないこうでもないとい工夫しながらなんとか身につけたお互いのマジックを、先生の教えどおり甘やかすことなく評価していきました。

身につけたマジックを更に極めるために日々練習して、子どもたちとのかかわりに活かしていきたいと思います。



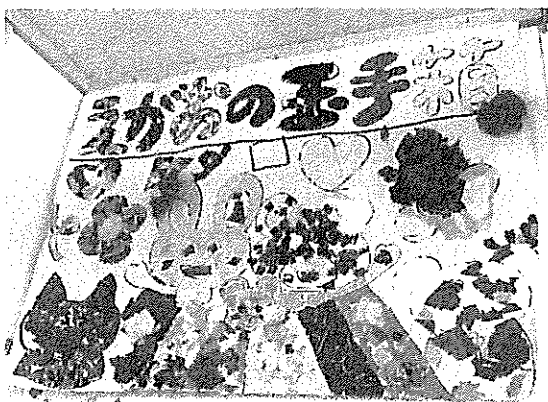
●「放課後等デイサービス【えがおの玉手箱】 施設見学研修」

施設見学の研修では、実際に放課後等デイサービスへ行き、現場で関わる施設長のはなしを伺いました。

放課後等デイサービスという大きなくくりでも、それぞれの特徴があるようです。えがおの玉手箱は『「自尊心・達成感」を大切に、毎日が充実した生活を過ごせるよう一人ひとりに合った支援を行う』といったねらいをかかげており、それが達成できるよう4つの要素から活動内容を考え、実施され「脳力」を育成することに努められている事業です。

実際に、1、2月のプログラムを拝見し様々な視点から想像力を豊かにし、それを自ら表現できるよう日常体験、非日常体験を組まれていることを感じました。特に、化学博士、街頭紙芝居師、魔法の音楽家、女優…等々多種多様なプロのパフォーマーの方と定期的に関われるような活動が印象的でした。

同じ児童と関わり、隣り合わせになっている事業でありながらも、知らないことが多く学ぶことができました。地域の中でも様々な関係施設が手を取り合いながら、一人一人のことを考え、関わっていく事の必要性を感じました。



あそび・施設間交流活動報告

あそびについて

今年度地域の子ども研究会では、

- ・施設内の子どもたちの遊びの充実を図る
- ・遊びを共有し、自施設に還元することで間接的な施設間交流になる

という2点をねらいに、今施設で子どもたちが関心を抱き、楽しんでいる遊び（外遊び・室内ゲーム・工作・イベントゲームなど）を共有、実践した。

【方法】

- ・研究会スタッフが室内、屋外や近隣でのあそびを記入
- ・各施設独自のあそびを共有し合い、実践
- ・施設対抗、または研究会スタッフ対子どもでできる遊びをチャレンジ企画とする
- ・実践したものをポスターなどで掲示し、他施設の子どもたちを知り、他行事につなげる
 - 紙コップタワー…制限時間内にどれだけ高く積み上げられるか
 - 高さ比べ…どちらが先に目標の高さまで物を積み上げられるか

施設間交流について

上記のあそびを研究会で進める中で「実際に子どもたちが集まって遊んだほうが楽しいのではないか」「全員に誘いかけるとすごい人数になる」「施設をまとめる高学年にまずはスポットをあて実施することで、自施設に帰って低学年に教えてくれるのではないか」と意見を出し合い企画を行った。

【ねらい】

- ・施設を越えて高学年が共にあそび交流を図る
- ・各施設の遊びを共有し、自施設に帰って低学年と遊ぶことで施設内の遊びの充実を図る

【方法】

- ・今池こどもの家にて実施
- ・各施設でカードゲーム、ボードゲームを持ち寄り、遊び方を教え合うことで交流
- ・外遊びでは施設独自の遊びを掲示し、遊びの名前を見て集まった子どもたちが何をするか決定。知っている子どもたちが教え合い交流する
 - レンジでチン！（こおりおにの派生）、えいりあん、ろっくん（コートとボールを使った遊び）
 - 掲示にはなかったがドッジボールをしようとの声掛けに大人、子ども共に遊ぶ姿がある

まとめ

今年度の実践のように、“あそび”ことを目的に子どもたちが集まり、共にする中で自然とコミュニケーションを取ることが子どもたちの新たな興味関心に繋がり、またここで生まれた繋がりが、自施設の子どもたちへと広がり、さらに地域の子どもたちへと広がっていくことが出来たらそれぞれがより豊かになるのではないかと思います。今後合同行事を行う機会が増え、地域の子どもたちも共にできる方法がないか考えていきたいと思ひます。

2022 年度ワークキャンプ報告

長居子どもの家 川畑 亮輔

開催日：7/3（日）8：00～17：00 場所：セツルの家

当所の参加予定人数 75 名（大人 41 名、学生 34）

○今年は6年生も加えて6年生以上のワークキャンプを企画しましたが、予想を超える人数が集まったのと、当日の雨で、急遽安全確保の為、小、中学生の参加を見送り、高校生以上と大人（約40名）でワークキャンプの作業を行いました。雨で進まない作業もありましたが、手慣れたメンバーが多く、思いのほか順調に作業が進みました。作業を一緒にする事で施設間の交流も生まれているように見え、自然の中でいきいきとした様子が見られました。



開催日：11/6（日）8：00～17：00 場所：セツルの家

参加人数：42名（大人 16 名子ども 26 名）

○秋のワークキャンプは夏に予定していたワークキャンプを雨で参加出来なかった小学6年生と中学生に声を掛けて行いました。夏残念そうにしていた子ども達も楽しそうに参加しており、「作業」だけでなく、「遊び」も入れて交流する事が出来ました。ご飯作りや作業、遊びなどの活動から自然と笑顔になり、少し寒い時季にも関わらずびわ湖に入る子も。自然の力はすごい。子どもを無邪気な姿を引き出してくれました。この思い出が子ども達を支える力になりますように。



～まとめ～

ワークキャンプの参加者が増え今年度は 2 回の開催になりました。その分ひとりひとりの満足度も高くなったように感じます。また6年生も対象にする事で、大地協での居場所を感じる事が出来たのではないのでしょうか。そして作業だけでなく、遊びも取り入れた事で、より自然体験の重要性を改めて感じました。作業中心のワークキャンプだけでなく、セツルの家の自然を活かした活動、遊びも来年度含めて考えて行きたいと思います。

行事の報告

第36回友だちドッジボール大会

育徳園子どもの家
上西 貴之

【日時】2022年 5月29日(日) 9:30~15:30

【場所】長居小学校グラウンド・体育館

【参加人数】257名

【参加施設】愛染橋児童館学童クラブ・阿さひ保育園つくし会・育徳園子どもの家
今池こどもの家・今川学園子どもの家・長居子どもの家・望之門学童クラブ
平和の子どもの家・やまと保育園子どもの家

計9施設

今年度の研究会でのテーマが「地域の子どもに目を向け、アクションを！」に決まり、コロナ以前のように、友だちドッジボール・フェスティバルに地域の子どもたちも参加できるように動き出しました。しかし未だコロナが収まっておらず地域の子どもたちの参加は見送ることとなった。

ドッジボール大会は2年ぶりの1日開催で、子どもたちも楽しみにしてくれました。去年がともだちフェスティバルと合同開催で、午後からのドッジボール大会が終わった後、子どもたちからは“もっとしたかった”などの声が多く聞かれた。1・2年生は施設対抗、参加人数の関係で合同チームをつくる。それ以外の学年は3・4年生5・6年生に分かれて施設バラバラの合同チームをその場でつくる。ここでのねらいは、子どもたちが自ら考え発言・行動できる。スタッフはあまり口を出さず見守り、状況を見て間に入るようにした。その結果チームの子たち同士の関わりが深まり試合中以外でも名前を呼びあったり、話したりする姿が見られた。他にもドッジボール以外にもボール遊びができるコートを用意し、誰でもきて遊べるようにした。



子どもたちからの感想

もっと試合がしたかった	楽しかった
午前だけでいい	賞状もらえてうれしかった
あつかった	他施設の子と仲良くなれた
午後から5・6年がほったらかされて嫌だった	OB・OGとして来年参加したい

保護者の感想

久しぶりにこういった活動を見られて嬉しかった	応援に来てよかった
参加した中高生も、他施設のOBに同じ学校の子がいて、そこから輪が広がっておりいい経験と、出会いになっていた	子どもたちの頑張っている姿が見ることができてよかった
学童最後の行事を見れてよかった	あつさが心配でした
他施設との交流がよかった	施設対抗と思っていました

運営スタッフ・指導員の感想

他施設の指導員やOB、子どもの名前を覚えたりと、交流としてのねらいをしっかり子どもたちが得ていたと感じた	時間配分等想定とは違うことがあっても、スタッフ同士で声を掛け合い、その場の担当に報告したりと、臨機応変に対応できていた
帰り道でも次の日も、ドッジボールの会話が尽きませんでした	試合数が少なかった2年生は休憩を多く挟むことができ、体力的にはよかった
OB・OGの方たちもよく動いてくれた	1日開催出来てよかった
低学年にも何度もルール説明してくれていた	コート線の線引きが効率化できればよかった
昼食時の学校外に連れていく事の負担	会場施設の準備物の多さが気になる
審判の細かいルールを理解しておくべきだった	OB・OG・試合は必要？
活発でない子たちの施設間交流の工夫が必要	OB戦に出ていない保護者の方の気持ちは？

ここに記載しきれないほどたくさんのお言葉をいただきました。ありがとうございます。

来年度に向けてもう動きださなければいけません、年間テーマをおきながら大会のねらいをもうけ、達成できるように取り組み、開催日時も5月でいいのか？もう1度見直す必要もある。この時期は近年とても暑くなり、熱中症のリスクも高い、今回は周りのサポート・テントを動かすなどの機転により無事に終えることができた。他にも大地協の行事を盛り上げていくにはOB・OGの力が必要不可欠。しかしお手伝いだけでは、おそらく多くの参加は見込めないだろう。手伝いに来たいと思ってもらえる何かを考えなければならない。その姿を見て参加している児童がOB・OGになった時にまた来たいと思ってもらえるようにしていきたい。今後の課題になってくる。

ドッジボール大会は“ドッジボールを通じて、交流・つながり・居場所作り”をねらいに行なっている。あくまでもドッジボールはその為の手段だと考える。行事や交流が、その場で終わらずに繋がることができるように、継続して行っていきたい。

9施設257名もの子どもたちが参加し、また各施設からお手伝いのOB・OGもたくさん来てくれ、保護者の方にも応援・参加していただきとても盛り上がりました。

来年度はもっとみんなが楽しめるように研究会一丸となって取り組んでまいります。

将棋大会

やまと保育園子どもの家
赤嶺 優真

【日 時】 2023年1月14日(土) 13:00~17:00

【会 場】 育徳コミュニティーセンター1F 早川記念ホール

【参加人数】 56名

【参加施設】 8施設(育徳園子どもの家・長居子どもの家・望之門学童クラブ・今池こどもの家
平和の子どもの家・やまと保育園子どもの家・阿さひ保育園つくし会
今川学園子どもの家)

今年度の将棋大会には8施設の参加があり、下は小学1年生から上は中学1年生までの子どもたちがそれぞれのリーグ、トーナメントで自分の実力を競いました。

個人戦の他にも団体戦やクイズコーナーを用意し、子どもたちは一日中将棋に触れていられる時間になったと思います。

団体戦では、自施設の子たちで組んでいるチームや、他施設の子たちと合同で組んでいるチーム等様々なチームがあり、施設合同で行う行事だからこそその交流が見られたと思います。

クイズコーナーでは、将棋にまつわるクイズが用意されていて将棋を始めたばかりの子から将棋に詳しい子まで皆が楽しそうにチャレンジしていました。



ともだちフェスティバル

今年度は天候の影響により、開催出来ませんでした。

開催日を延期にしたり、コロナ対策で規模縮小等、どうにか開催できないかと検討しましたが中止になってしまった事は凄く残念です。

次年度に行う行事は今年度の反省を活かしながら、延期になった場合にはどういう風に行うことができるか等を検討し、行事の用意に取りかかりたいと思います。

個人の振り返り

2022年度を振り返って

やまと保育園 子どもの家
赤嶺 優真

今年度の研究会は自分にとって3年目の研究会でした。

3年目にもなれば大体の流れや、やるべきことが分かってきて、1・2年目よりも少しは気持ちが高くなるかなと思っていましたが、決してそんなことはなく、逆に今まで経験した研究会で一番大変な年だった様に思います。

社会状況も変化し今年度の研究会は、現地に集まって対面方式での話し合いが簡単になりました。ZOOMを使った全体での会議は無くなったという事です。ZOOMは現地に集まる必要が無いので利便性もありますが、全体で討議をするとなると少し難しく感じることもあったので今年度の研究会はやりやすいのかなと思っていました。

そして、今年度の研究会は「地域の子どもたちの豊かな生活・成長を目指す」とは別に「地域の子どもに目を向け、アクションを！」という年間テーマを掲げながら研究会を進めていくことになりました。

行事のドッジボール大会や、ともだちフェスティバルでは年間テーマに沿った開催をどうやったらできるのか、地域の子たちを巻き込めるのか？参加方法は？等実現するためにはどうしたらいいのかを話し合いながら研究会を進めてきました。

しかし今年度は、ドッジボール大会、ともだちフェスティバル共に地域の子たちを巻き込んでの開催はできませんでした。また、ともだちフェスティバルに関してはフェスティバルの開催自体も出来ず子どもたちには残念な思いをさせたなと感じました。

地域の子たちを巻き込めなかった原因の一つにはコロナの感染拡大が関係していて、過去2年苦しめられましたが、今年も同じく苦しめられる形となりました。

来年度のイベントは今年度出来なかったことを実現できるように、今年度話し合った時間も無駄にならないよう、来年度に繋がれたらと思います。

イベントの開催も天候によって中止にならないような開催方法だったり、日程の調整が必要だなと実感しました。

今年度の研究会は今までとは違うことにチャレンジした結果、全体的に時間が少なく感じました。個人的には余裕も無くバタバタと毎回研究会が終わっていき、これで大丈夫か？と思うこともありましたが、今年度の研究会は今までで一番、全体での話し合いを行った気がします。

それは、新しく研究会に参加された先生も、去年から引き続き研究会に参加している先生も関係なくみんなで熱く語っていた結果なのかなと思い、個人的にはすごく嬉しく感じました。

来年度の参加される先生が今年度と同じとは限りませんが、今年度の熱量をそのまま来年度にも繋げながら、子どもたちにとって有意義な時間を作っていけたらと思います。

2022年度振り返り

阿さひ保育園つくし会 木野 伸哉

2022年5月から子どもと関わる職業に就き、もうすぐで1年が経過します。

以前までは学童とは何かを考えたこともなく、放課後に子どもたちが集まる場所なんだな、と思うくらいのものでした。実際に今まで小学生と触れ合って過ごした経験もほとんどなく、小学生とはどんな存在だろう？どんな話をするのだろうか？など考えながらその日を迎えました。

いざ学童部屋に入ると、みんなが「はじめまして！」「こんにちは！」「名前なんていうの？」と気さくで元気よく話しかけてくれる子どもたちばかり。私はすっかり安心して自己紹介をして子どもたちと一緒に全力で遊びました。

その中で、ただ宿題を済ませて遊ぶだけではないこと、放課後に集まるだけではなく、子どもたちの社会性が築き上げられる場所だということ、また行事達成の目標に向かって子どもたち自身が考えて行動をしていることなど、指導員としてやってきた私が子どもたちから教わることばかりで驚きを隠せませんでした。

学童へきて驚いたことはたくさんあり、ひとつ挙げるならば行事の豊富さです。遠足があり、おやつ作りがあり、ドッジボール大会があり、キャンプがあり…。私が小学生のころに経験したところのない行事が盛んで、あのころに学童にいればもっと楽しかったんだろうなあ…と感じられるほどです。家に帰ってもゲームをしたり、近くの広場や公園で友達と遊んだりと私自身もいろいろな経験をしましたが、学童のほうが楽しい！と思える時間も大人になった今でこそわかるような気がします。特に他の学校の友達ができる、ここでしか会えない友達がいる特別感も素晴らしいものと感じられました。

そんな行事盛んな学童ですが、今年度は天候に恵まれないこともあり、存分に楽しんでもらうことができなかった点が少し心残りではあります。

そして地域の子ども研究会。自施設の子どもたちのみならず、地域の子どもたちに向けての取り組みを行う研究会に関心を抱き、またその集まりで決まる行事の内容、研究活動や日々の各施設の姿を知り、毎度行ってよかったと思える時間となっていました。実際に自施設での活動だけではわからないことや知らないことも多々あり、この研究会という集まりで学ぶことや新しい子どもたちとの遊び、関わりを学ぶとてもいい経験をさせていただいたと実感します。

また、今年度は初めての経験ばかりで右も左もわからずに突き進んできましたが、来年度からはこの1年の経験を活かして、より子どもたちと密接に関わり、自施設や地域子どもたちのためにできることを考えて実行に移せられたらと思います。

2022年度 地域の子ども研究会をふり返って

愛染橋児童館
秦野充勇

今年度、はじめて地域の子ども研究会（以下、「研究会」という。）に参加させていただきました。研究会の活動について把握できていないことが多く不安もありましたが、他施設の先生方が丁寧に教えてくださり非常に助かりました。私の担当は「行事」・「アクション」、研究活動は「貧困」がテーマです。

行事担当としての最初の大きな仕事は『ともだちドッジボール大会（2022年5月29日）』の開催です。私がこれまでに勤務した学童では他施設との合同イベントがほぼ無かったので、緊張と共に期待感もとても大きかったです。開催直前は勤務後に行事担当で会議をおこなうなど大変なこともありましたが、ふり返るとそれも楽しかったように思います。当日の動きなどは他の先生方の指示に助けられた部分が大きかったです。来年度以降に参加することがあれば、より主体的に動いていきたいです。大会中は1・2年生コートの審判を担当しました。ボランティアの方々とも協力しながら滞りなく試合運営することができたと思います。ボランティアの方々の力が大会に活力を与えているので、これからも継続して参加してもらえるような関係性を築く必要性を感じました。他施設・自施設の子どもたちの頑張りも見ることができ、とても有意義な大会でした。

秋のもう一つの大きなイベント『ともだちフェスティバル』は雨天（順延日も雨天）により今年度は中止となりました。雨天を想定していなかったため順延日の設定や中止の判断基準が曖昧で、研究会のメンバーが混乱してしまったことは反省です。各施設の子どもたちの期待を裏切ってしまったこともとても残念でした。来年度は開催要項の内容をより詰めていきたいと思いました。今年度は地域の子ども向けの行事もおこなう予定でしたが、開催することができませんでした。『地域の子どもに目を向け、アクションを！』というスローガンを実現するためにも、来年度の開催を目指したいです。

研究活動では貧困をテーマに話し合いをした結果、子どもたちの「居場所」について知りたいと考えるようになりました。家庭環境などの格差により居場所がない子どもたちがいるのではないかという仮説をもとに、アンケートを実施することにしました。ご協力いただける小学校もあるので、順次データを集めていきたいと思います。調査の範囲を広げることができたなら、地域ごとの差異も見ていきたいです。その結果をもとに子どもたちにどうフィードバックをしていくかが次年度の課題になってくるのではないかと思います。

今年度は初年度ということもあり、一年を通しての流れを把握することで精一杯でした。他施設の先生方の助力のおかげで何とか役割を果たすことができました。来年度も参加することができたのなら、私の力で地域の子どもたちをより支援できるよう研鑽していくつもりです。

1年間を振り返って

育徳園子どもの家
上西 貴之

あっという間に1年が過ぎました。この1年を振り返ると、自分の職場での立場が変わり、施設自体も体制が変わり、変化の年になったと思う。研究会のメンバーも半分代わり新体制でスタート。私は2年目となりドッジボール大会では実行委員長をさせていただきました。時期が5月ということもあり、約2か月の準備期間で進めていかなければなりませんでした。進めていく中で子どもたちの意見を吸い上げ大会のねらいに副ったものにしていく難しさを知りました。課題も多く出てきたので、来年度は少しでも解消できるように話し合いたいと思っています。今回は周りの方のサポートもあり特に大きな問題もなく終わることが出来ました。ともだちフェスティバルは残念ながら雨の為延期に次ぐ延期で実施されませんでした。雨の場合の案も用意しておくべきだったと思う。

研究会の“地域の子どもに目を向けアクションを！”というテーマで活動してきました。その中でドッジボール大会とフェスティバルでは地域の子どもたちを参加させてあげることが出来ませんでした。なにかできないか考え地域のイベントに参加し、アンケートを実施して地域の子どもたちの実情を調べることに。私は施設のイベントと被ってしまい参加は出来ませんでした。後で話を聞き、“やってよかった！一緒にやりたかった！”と感じました。机の上でいくら考えても、実際やってみないとわからない事の方が多い、やってみて初めて実情・改善点が見つかる。これを繰り返すことで見えてくる。

自身では事務仕事が多くなり、子どもたちと過ごす時間がなかなか取れず、机にむかう毎日でのために働いているかわからなくなる時も、子どもたちから“遊ぼうや”と誘われても“もう少し待って、今日は無理そうや”など断ることが増え私自身悶々とする日々が続きました。子どもたちには退屈な思いを多くさせてしまったと思います。来年度は計画性を持ち、時間の使い方を考え、子どもたちとの時間を大切にしていきたいと思います。

利用児童で気になる子の支援も5月から始めました。今まで学校と連携が取れておらず、情報共有できていませんでしたが、この1年で関係作りが出来てきたと思います。これからは、学校と子どもの家の特性を生かして児童1人ひとりにあった支援ができるように動いていきたいです。

何事においても“やる・する”を実行に移すまでのプロセスが多すぎると感じる。企画の段階ですり減ってしまい、疲れ、“もういいや”とあきらめてしまう。結果挑戦しようとする気持ちがなくなる。子どもには“なんでもやってみたら、挑戦することが大切”と口にしてはいるが実際大人が挑戦しない、できない。子どもは大人を見て成長していく、見本となる大人ができないことは、子どもが出来ないのは当然だと思う。

新しい事を始めるには当然リスクがついてくる。社会はそのリスクを下げる、回避することばかり考えてしまう、そうではなくリスクとその人が、対象者に対して適切なリスクなのか、と考え方を変えてみてほしい。リスクなしでは人は成長しない、しかし自分のキャパ以上のリスクを背負う必要はない。自分に合ったリスクを選び行動することが大切。

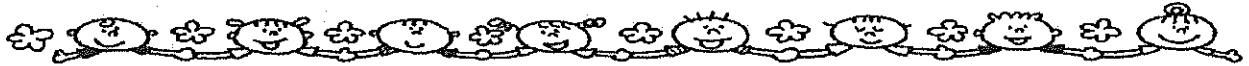
1年間を振り返って

地域の子どもたちの豊かな生活・成長を目指す

～地域の子どもに目を向けて、アクションを！～

今川学園 子どもの家

森川 貴史



今年1年を振り返るとあっという間の1年でした。昨年学童保育の担当者になり、分らない事だらけの1年が過ぎ、「さあ！2年目」と意気込んでいると、今年度から地域の子ども研究会に参加。大地協ってなに？研究会ってなに？という状態からのスタートでした。様々な事業所・指導員が集まり、不安と緊張でいっぱいでしたが、いざ始まると子どもたちを思い、子どもたちに対して自施設で何が出来るのか？大地協の子どもたちに何が出来るのか？地域の子どもたちに何が出来るのか？と積極的な様々な議論が交わされ、温かい心を持ち、熱い思いを持った職員集団ということがわかりました。

子どもたちとも一緒に考えながら、話し合っ今年は、様々な大地協での行事に参加させてもらい、普段見る事の出来ない子どもたちの姿が見られて大きな発見がありました。緊張して表情を強張っている子、他施設の子どもたちに中々関わりに行くことが出来ない子。しかし、行事が始まると自然と笑顔になる子どもや、他施設の子どもに積極的に話しかけている子どもの姿も見られました。すべての場面において“遊び”が中心にあり、遊びを通して他施設の子どもたちとも仲良くなり、一緒に成し遂げる、一緒に経験する事での横のつながりが増え、子どもたち自身の自信にもつながっていき、大地協の意義・必要性をととも感じました。

年間テーマでもある『地域の子どもたちの豊かな生活・成長を目指す』に対して自分に何が出来るのかと思う日々でした。研究会での様々な研究活動や職員同士での話の中で知識を増やし、子どもたちと行事を創り上げていく中で、“自分に出来る事”を考えるようになりました。地域の子どもたちに出来ることで、まず地域に目を向け、関わりを持つように心掛けました。子どもたちとの移動の際には、地域の子どもが居たら挨拶をする事を心掛け、公園に遊びに行った際には、声を掛けたら一緒に遊んだりして関わる機会を増やしてきました。顔なじみになる事で子どもたちの変化や困り感に気付くことが出来るのではないかと考え、実施しました。大人が意識しながら取り組むことで、子どもたちの豊かな生活・成長に繋がっていくのではないかと考えています。子どもたちを取り巻く環境、子どもたちの要求や地域の様子や課題見つけていく事は、自分たちの役割ではないかと感じます。今後も課題について研究会で議論し実践していく事で子どもたちの育ちに繋がっていくのではないかと思います。

子どもたちが家族や地域の方たちに支えられ、安心して過ごせる居場所となれるように、この1年の経験を無駄にせず日々努力を惜しまず学び続けていきたいと思っています。



一年間の振り返り

地域の子ども研究会目的『地域の子ども達の豊かな生活・成長を目指す』

年間テーマ『地域の子どもに目を向け、アクションを！』

文責：今池こどもの家 山田夢果

社会人になり、自施設で働き始め、地域の子ども研究会に携わり、早くも4年が経ちました。私が初めて地域の子ども研究会に参加したときは、「不安」という感情が大きく締めており、何事にもその感情が付きまとっていたことが記憶に残っています。しかし、その中でも当時の代表をされていた、平和の子の岡村先生が「研究会は、ただいまと言える、僕の居場所です。」と話されていたことは鮮明に覚えています。それと同時に、あまり意味が分からず「私にとって今ここはすごく不安で緊張する場所やなあ…」と思いながら聴いていたことも覚えています。

今年度は、初めて代表という立場に立ち、指揮をとることの大変さを知りました。また、意義のある研究会にするために年間テーマを設け、それに向かって様々な活動を考案する楽しさを感じました。そして、その考案したものを、なかなか実践することができないもどかしさも感じました。しかし、どれもすべて、私一人ではなく研究会全体で一緒に感じていたことと思います。

より良いものを創っていくために、1年目のころを思い出しながら、職員同士が話しやすい環境を整えることを意識しました。初めて参加される方にも理解していただけるようにできるだけ丁寧に説明したり、自己紹介時に心理テストを用いたりしました。しかし、振り返れば様々な場で安心して話したり、変わったことを取り入れてみたりできたのは、反対に、環境を整えて頂いていたように感じます。

代表という大役を頂きましたが、思っていたより負担はなかったです。なぜなら、大地協ニュースの17号でも書かせていただきましたが、研究会は自分の力を引き出してくれる周りの様々な力がたくさんあるからです。自分がたくさん支えていただく立場にたって、人が成長していくにはこれらが必要不可欠だと改めて感じ、うまく言えませんが、「子育て」と似ているなとも思い、子どもや大人関係なく、エンパワメントを図ることの重要性を体感しました。

ねらいを達成するにはまだまだ及ぶことができなかった今年度で、代表としての反省点はたくさんあります。来年度は、整った環境に甘えすぎず、それぞれが高めあって活動し、子どもたちに還元できるように励みたいです。そのために、今の子どもたちや自分たちには何が必要かを考え、話し合い、実践できるように心がけていきたいです。

今年度も無事に終え、1年目の時は理解することが難しかった岡村先生の言葉の意味が、理解できるようになってきました。「居場所づくり」を心掛けながら現場でも働いている今、頭だけではなく、自ら体感できるこの研究会の素敵さと、必要性を4年目にしてさらに感じています。先輩方が築いてきた「ただいま」と言える地域の子ども研究会という居場所。それを繋げるためには…。いつまでも考えることに、楽しさを感じられるような人でありたいです。

2022年度の振り返り

四貫島友隣館子どもの家
荻野 遥馬

今年度の地域の子ども研究会は「地域の子どもに目を向け、アクションを！」というテーマでスタートしました。

「地域の子どもに目を向けてアクションを起こす。」自分は地域の子どもに目を向けられていたのでしょうか。アクションを起こせていたのでしょうか。自信を持って「できていた」とは答えられません。

マスクを着けずにホールで走り回って遊んだり、写生会やピクニックに出かけたり、手作りおやつや給食など、徐々に開催できる行事が戻ってきています。そうはいつてもまだまだ制限は残っているので、以前のように気軽に外に出かけ、気軽に思いついたらおやつを作れるような日はすぐには来ず、子どもたちや職員のしたい事はなかなかできず、子どもたちの行きたい場所、職員が連れて行ってあげたい場所に行けない事も多々ありました。我慢させてしまうこともたくさんありました。

そう振り返っていくと、なかなか思うように外に出ていくことが出来ない中で地域の子どもたちにアクションを起こすことはできていないだけでなく、自分の施設の子どもたちにさえアクションを起こせてもいなかったのだということがわかりました。

2022年度は非常に慌ただしく過ぎていき、あっという間に終わってしまった1年間でした。

毎年この時期になると嫌でも1年間を振り返り、ああまた出来ていない事ばかりで子どもたちに楽しいことがしてあげられなかった1年間を過ごしてしまったのだ…と反省をします。そして今年度こそ今年度こそと毎年のように呪文を唱えながら新年度を迎えます。

今年度こそ。地域の子ども研究会で学んだことを活かし、まずは自施設の子どもたちのために自施設の色を活かしながら出来ることに取り組んでいきたいと思えます。



2022年度 1年の振り返り

長居子どもの家 横山 奈津美

今年度も引き続き、地域の子ども研究会に参加させて頂きました。

研究会に参加させていただく事になり4年目でも緊張の中スタートした事を思い出します。

昨年度はドッジボール大会と友だちフェスティバルを合同に行いましたが、今年度はドッジボール大会のみを行うことが出来ました。子ども達も賞状をもらうために日々練習を頑張っている姿を見てきました。行事を通して他の施設の子ども達と関わり切磋琢磨し、そこでつながりが持てたりとするので、開催出来て良かったと思います。

残念ながら友だちフェスティバルは雨で今年度は出来ませんでした。その中でも研究会メンバーで沢山話し合い子ども達が楽しめる様に次年度に行う事になりました。

また、行事だけではなく、情報交換では施設で困っている事を相談すると沢山の意見がもらえます。遠足の行き先なども参考になりました。遊びと情報交換は、各施設がどのような遊びをしているのかアンケートを取り実際に指導員が公園で実践した内容を子ども達に教えるなど遊びの幅が広がりました。今年度は、研修を数回行うことができました。施設見学やマジシャンのマジックの講習はとても良い経験になりました。

今年度も研究活動は「アンガーマネジメント」について学びました。去年度とメンバーも変わり最初は去年度学んで来たことを中心に話し合い、今年度は自分たちが学んだ事を子ども達に伝えていくというテーマで進めました。子ども達の怒りに着目したアンケートを取り、子ども達にわかりやすいようにイラストの対処方法などを一つのポスターにして貼りだす所までを目標に日々行ってきました。

行事などの話し合いなどが入ってくると、研究活動の時間が短くなったりして中々進まない事があったり、最後の話し合いでも計画を立てていたらスムーズに進められたのではと言う意見も出たので次年度からは改善していけたらと思います。

この一年学んだ事を活かして、来年度も色々な事を学びたいと思います。

一年の振り返り

長居子どもの家 川畑 亮輔

研究会の年間テーマでもあった、「地域の子どもに目を向けてアクションを！」のねらいを意識した一年間。地域福祉施設の職員として初めて地域の子どもに目を向けられた一年だったと思います。

施設では、学童に登録している不登校の児童を、朝から受け入れていましたが、2022年度は登録に関係なく地域に対象を広げて活動をし始めました。そして卒業生たちの居場所としても地域にあり続ける為に、食堂やキャンプ、学習会など、「友だちを連れてきてもOK!」の活動を開催する事が増えました。「どや！地域福祉してるやろ！」と感じていた自分でした。

しかし振り返ると、食堂に地域から来る子がちらほらで、後は卒業生。地域に不登校の児童が居てる。相談が来る。しかし地域の不登校の子ども達が朝から来る事はありませんでした。もちろん施設の子や、卒業した子らが不登校となり、朝から利用する事はありましたが、地域の子ども達の利用には繋がりませんでした。

まだまだ足りませんでした。何が足りないのか、まだまだ検討がいりますが、ただ単にやればいいわけではありませんでした。「やってるからおいでよ。助けたるやん。」ってやっていれば、困っている人から来るものだと考えていましたが、当事者からしたらどう感じるのだろうか。「別にいらんし」っていう子も居てるのかな。少なくとも自分は助けたるやん。の精神でした。そこに壁が出来てしまったのではないかな。なぜこちらからもっと歩み寄れなかったのか。どうすれば当事者の気持ちに寄り添えるのか。助けてと言ってもらえるのか。まだまだ課題がたくさんあります。

そんな中、研究会でも地域への活動が必要なのではないか。と議題に上がる事が多くなり、研究会として、地域にも目を向けようと、活動の幅が広がってきました。話し合いをしている時の活発さや熱のこもった意見交換、企画案の話し合い、各施設の子ども達の様子、地域の様子などの話には、自分もすごく刺激を受け、やる気に繋がっています。また、自施設の活動の企画や提案は自分1人だったのでその話を聞いてもらったり、意見をもらえたりするのはすごく心強く、なんとなく孤独だった自分も救われています。

そんなチーム力のある大地協や研究会で地域に目を向けた福祉が行えると、どれだけの力が発揮できるのか。ちょっと怖いけど、わくわくします。

今年もらった知識ややる気を来年にも繋げ、継続した活動が出来るようにしていきたいと思っています。

今年度の振り返り

平和の子どもの家

小澤 麻里

私は今年度初めての子どもの家の担当、そして初めての地域の子ども研究会への参加となりました。4月は自施設の学童の流れや子どもたちの把握でいっぱいになり、今振り返ると記憶がないことも多いです。そんな中で研究会もスタートし、分からないことも分からず、ただただ時間が過ぎ去っていったように感じます。

5月には初めての行事、ともだちドッチボール大会がありました。学童の行事に参加したことがなく、見通しも立てられないまま、周りの方々が計画してくださるのを聞くことしかできず、当日まで不安が大きかったです。一方で子どもたちは、ドッチボール大会に向けて、自施設の屋上でボールを投げる、受ける、避けるなどの練習をしたり、他学年と交ざり合って練習試合をしたりと頑張って練習する姿を多くみかけました。他の施設のお友だちと対戦するのはドキドキすると、胸を弾ませていました。当日は晴天に恵まれ、暑さから疲れを見せる子どもたちもいましたが、真剣な表情と試合を楽しむ姿が印象的でした。自施設に帰ってからもドッチボール熱が冷めることはなく、楽しむ姿に嬉しさを感じました。

夏にはコロナが流行りキャンプに行けなかったり、雨天の影響で友だちフェスティバルが開催できなかったりと、子どもたちには残念な思いをさせてしまいました。子どもたちにとって何が大切か、子どもたちのために何が出来るか、常に何かアクションは起こせないか考えている研究会の皆さんに刺激をもらい、自施設で何か出来ないか考えるきっかけをもらいました。

この一年で、研究会内で行った研修や他施設の取り組み、遊び、施設の設備や工夫している点など、たくさん教えていただきました。毎回個性的な研究会の皆さんの話を聞くことで、自分自身の学びになり、自施設に持ち帰って出来ることを検討する機会をいただきました。そして何よりも楽しかったです。楽しい雰囲気の中で行う行事や学びは、いい環境や循環をもたらすと思います。その雰囲気作りをして迎え入れてくださった皆様に感謝でいっぱいです。一年間ありがとうございました。



2022年度 地域の子ども研究会を通して自身の振り返り

望之門学童クラブ

大西 奈々子

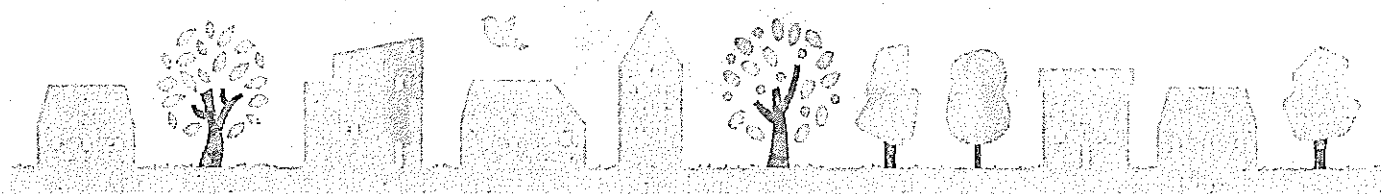
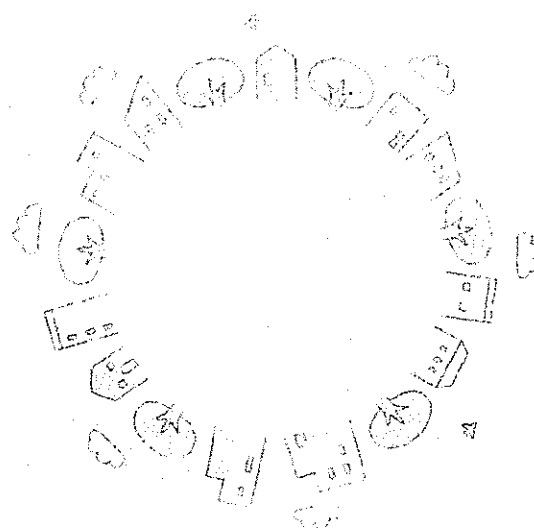
2022年度の地域の子ども研究会年間テーマは“地域の子どもに目を向けアクションを”でした。この年間テーマを軸に何ができたのか？と結果・成果を求められると何も出来なかったという報告になってしまいます。

研究会で行っている行事には今年度も地域の子どもたちへの誘いかけが感染拡大予防の観点から出来ませんでした。地域の子どもたちのみを対象にしたイベントを実施しようと試みましたが、この件も実施には至りませんでした。

学童施設職員として従事している中で、なぜ利用者の施設の子どもだけではなく地域の子どもに目を向けるのかと改めて考える機会となり、その点について研究会スタッフでディスカッションすることが出来ました。地域に困っている子がいるのではないのか？その子どもたちに何か出来ることはないか？このままではダメな気がする、何かしたいという気持ちが大きくなる1年でした。しかし何も出来なかった現状と自施設での活動に手いっぱいという免罪符を持ちながら、それでもやりたい気持ちで焦りを感じ始めていますが、自己有用感を得たいだけなのではないかと考える瞬間もあります。やりたい気持ちと、焦りと、疑念のループの思考になってしまうのはなぜなのかと改めて自身の考えを見つめ直した際、私の中に中核がないからだと思います。“何に困っているのか、困っている人がわからない、どうしたら繋がれるのか”など、地域のニーズが掴めていないことが課題だと思います。

困っている（ように見える）人がいないんだったら誰も困っていないんじゃないか、という楽観的な考え方はもう出来ません。必ずいる。私に出来ること・自施設に出来ることは微々たるものですが、子ども研究会でなら、大地協でならもう少し、出来ることの幅は広がるのではないか。そう考えて今年度の研究活動を進めてきました。

自施設でも、“これ”がこの地域には必要だと確信のある活動が今はわかりませんが、少しずつ施設利用の子どもたちや、地域で出会った子どもたちとの関わりを大切に、必要だと思う小さな一歩から、細く長く進んでいきたいと思っています。



発行

2023年3月31日

特定非営利活動法人

大阪市地域福祉施設協議会